



KELES Newsletter

No. 3 発行日 2006年(平成18年)6月15日

関西英語教育学会ニューズレター



学会創設10周年
記念ロゴマーク

新会長挨拶

瀬川 俊一 (京都府立大名誉教授)

更なる前進を

去る5月28日の会員総会の際に会長選挙が実施されました。力量不足を承知の上で、2期目の会長職を拝命することにいたしました。今後の2年間、本学会発展のために微力を尽くしたく思っております。会員の皆様方、宜しくご支援・ご指導・ご鞭撻のほどお願いいたします。

本学会創設から10年を経たのを契機といたしまして、今後の更なる前進のために学会全体像の見直し作業に取り組みたく思っております。本学会会則の改変作業に着手して、以前にも増して迅速且つ効率良い学会運営が可能な体制への移行を意図しております。先般の総会に於きまして改変方針の概要を承認して頂きましたので、7月22日の臨時総会に上程するため鋭意検討中です。具体的には、(1)事務局員を幹事として幹事会を構成し、実働組織としての位置づけと責任を明確にする、(2)理事(6名)を評議員(約12

名)とし、学会運営の支援体制を増強する、(3)より多くの会員が参加しやすい紀要編集へと改変する、(4)セミナーをワークショップ主体にして年間4回程度開催する、等々の案件を準備中です。

教育界は急変の時代を迎えているように思えます。教育基本法の改定、6・3・3・4学校制度に改変をもたらす多様化、小・中学校義務教育のみならず志望者は大学に到るまで全員入学が可能な時代の到来、それに伴う教育内容・教育方法の多様化、学習者の学力到達度差の顕在化、等々。謂わば教育界激変時代の到来です。

本学会の主役は会員の皆様方です。主役としての誇りと自覚を持って、今後とも本学会の諸行事に積極的に参加して、自己研鑽と情報交換の場として本学会を活用して頂ければ嬉しく思います。教育研究・英語教育研究・英語教育実践の発展のために、全会員一丸となって、半歩前進、更に半歩前進しようではありませんか。

第10回記念研究大会報告

日時:平成18年(2006年)5月27日(土)・28日(日)

会場:龍谷大学 深草学舎

後援 京都府教育委員会, 京都市教育委員会

大会報告

岡 良和(人間環境大/KELES会計)

去る5月27日(土), 28日(日)の2日間にわたり, 関西英語教育学会第10回記念研究大会が龍谷大学深草学舎で行われました。20件の研究発表, 12件の実践報告, 2件のワークショップ, 2件の講演, およびシンポジウムが行われ, 記念研究大会にふさわしい内容のプログラムでした。

参加人数も延べで350名にのぼりました。会員のみならず, 学生を中心に非会員の参加も多く, その場で入会される方も見られました。このことは本学会が広く注目を集めていることを示すものと思われます。

今年度は, 記念事業として, 学会ロゴマークが誕生し, 論集DVDが発刊されました。

今回の研究大会は, 本学会が, 次の10年に向けて力強い一歩を踏み出したことを示す, 意義深いものであったといえるでしょう。

第1日 研究発表・実践報告

【第1室】司会/報告:溝畑 保之(大阪府立鳳高校)

ダイアログジャーナルライティングのプロセス分析 - どのように学習者は「模倣」しているか -

佐藤雄大(名古屋大・院)

県立工業高校の2年生三人の生徒がダイアログジャーナルライティングを行っている場面を録画し、研究者とともにその録画を見ながらどのように考えて筆が進んだかをプロトコル収集し、分析を行った。発表者は、ライティングを相互行為として捉え、その中で「模倣」が学習を引っ張る点に注目し、VygotskyのZPDの観点からダイアログジャーナルの意義を考察した。取り上げられることの少ないが探求されるに価値のある学習過程を丹念に見つめたすぐれた研究であった。

ライティングにおけるリフレクティブ・プラクティス:教師も変わる授業をめざして

山本真理(兵庫工業高)

発表者は、授業前に生徒のobjectives、教師のobjectives、procedureを、授業後にreflectionを英語で記述するようにした。教師側は、徐々に授業に充実感を覚えるようになり、また、生徒の側でも学習に対する態度などが向上した。生徒の考えを受け入れ、授業を計画する際に生徒の思いを考慮し、「学び」の意味を生徒と共に考え、学習過程を生徒と共に創造するような学習者中心の授業を目指すようになった。生徒と共に教員が伴走している姿が目浮かぶ発表であった。

Journal writing in the EFL classroom: A win-win activity for learners and teachers

楊 涛(関西大・院)

大学2年生のオーラルの授業でLearning Journalを書かせることで、学習者の自律性が向上するかを調査するため、1) Self-initiative、2) Making plans、3) Self-control、4) Flexibility、5) Taking actions、6) Concentrationの項目で事前事後アンケートを行った。コメントで教員と学生とのレポートができ、大半の学生がジャーナルに好意的である等のアンケートを紹介された。時間的な制約のためジャーナルが負担となる学生についても言及された。ジャーナルが学習を生徒自身が管理する一助となることがよくわかる発表であった。

大学2年生専攻語学英作文 Authenticity を軸とした授業の試み

横田玲子(神戸市外国語大)

大学の英作文の授業にWhole Languageに基づく小グループでのプロジェクトの実践を紹介いただいた。教授へのインタビューに基づく紹介文や得意料理のレシピの

作成等を目標としたものであった。特にAuthenticityを「人に関わる」ことに求め、目標に至るプロセスを大事にしていた。最終的には写真やイラストを効果的に使用した小冊子ができあがった。そこに至るまでの添削の例も紹介され、きめこまやかな指導があり、初めてこのような成果が生まれることを実感した。

【第2室】司会/報告:奥田 隆一(和歌山大)

ある私塾の英語教育 ~浜松の英語塾「齋藤塾」について~

小野澤 隆(浜松大)

大正・昭和の時代に浜松に存在していた「齋藤塾」について紹介された。塾主である齋藤謙三が尋常高等小学校と正則英語学校を出ただけで、後は独学で英語を身につけ、塾を開き、どのような理念で教育したかなど、彼の略歴、人物像、塾で使われていた英語の辞書や教材などを説明された。教育者としての齋藤謙三のすばらしさは理解できたが、どういう方法で英語を教育したのかについて触れられなかったのが残念であった。

生きる力を養う英語の授業

浦崎 和香(立命館大・院)/川本 朋子(立命館大・院)

文部科学省が示している「生きる力」の育成を英語教育の観点からどう考えるかということ、具体的な英語の授業の例を示して、説明された。New Crown 2, Lesson 5のMy Dreamを使い、将来の夢を語ることにより、自己理解、他者理解を深め、対人関係の構築ができるということを発表された。ただ、今後、他ののレッスンではどういう授業展開をするのかに関して検討する必要があらうかと思われる。

高校英語教師のHOMEWORKの認識:面接法による研究の中間報告

高橋 昌由(大阪府立山田高)

英語のHOMEWORKについて、高校の英語担当の先生に対し、面接によりHOMEWORKについての重要な要素を見つけ出そうとする研究の中間報告であった。ただ、インタビューをしたのが5人だけということもあり、今までの研究で出てこなかった重要な項目がいくつか確認されたと説明されたが、この点については今後の研究に待ちたい。ただ、教員のHOMEWORKに対する認識が中心で、学生の英語力の向上とHOMEWORKとの関係について論じられていないのが残念であった。

英語指導力向上に向けた取り組み-LL機器の効果的な活用を通して-

高木 浩志(宝塚市立高司中)

宝塚市の中学校の先生方が作られた教材を、市内の中学校の先生方が共有できるように、宝塚市立教育総合センターのホームページにアップロードし、市内の先生方で自由に使えるようにしているという。また、それらの教材をLL教室でどのように使っているかについて発表された。いい試みだと思われる。今後、ALTを使い、音声やビデオの共有を考えると、さらにいいものになると思われる。

【第3室】 司会/報告: 藪内 智 (京都精華大) リーディング指導におけるフレーズ音読・フレーズリーディングの実践 - 速読・直解を目指して -

名和 正博(山陽女子中・高校)

フレーズ音読とは英文をフレーズ単位に分ける音読のことで、それを中心にした授業の効果について報告された。フレーズ音読をすることにより、フレーズごとに意味を理解し、母語である日本語とは違う語順に慣れ、また生徒の頭の中にその語順を定着させ、英文をそのままの語順で理解できるようになると発表者は考えている。また、音読は黙読と違い、返り読みができないことも、そのままの語順で理解させる重要な役割を果たしている。具体的には、フレーズ音読が指導過程の中でどのように位置づけられ、どのように展開されたか、そして、その結果リーディング指導に音読が有効であること、音読の動機づけになることなどの効果が認められたことが報告された。

和訳先渡し授業を取り入れた授業改革

高田 哲朗(京都教育大附属高校)

訳読式授業から脱却するために、これまで「二度読み方式の授業」を実践して来た経緯がまず報告された。続いて、昨年度それを改良するのに、いわゆる「和訳先渡し授業」を取り入れた英語の授業を1年間の実践が報告された。授業に関するコンセプト、様々な音読活動、そして授業で使用するワークシートの紹介があり、この授業ではトレーニング中心でペアワークを多用した授業が展開できたことが述べられた。また、音読の時間もこれまで以上にとれるようになった効用も認められた。今年度は英語でも同じやり方で授業が行なわれており、指導の継続性が報告された。

リーディングマラソンの試み

宮崎 操(舞鶴高専)

2003年前期の講読の授業で、学生の自主課外活動と

して課したリーディングマラソンについての発表であった。普段の授業の形式は、使用教科書は新聞記事を集めたもので、授業内容は通訳訓練で「前からの訳」と言われる訳出、repeat after the teacherによる音読、テキストを見ながらのシャドーイングという形式のため、たくさん読むということができないので、自主課外活動として、リーディングマラソンを設定した。リーディング課題を提出した学生と提出しなかった学生の成績を比較すると、提出した学生の成績の伸長度が著しかった。

高校・大学における効果的多読指導法

高瀬 敦子(関西大)

多読は、今の日本の英語教育に不足している英語のインプット量を補うものとして有益であり、正確さの追求に偏りがちなボトムアップ方式の英語教育に対して、流暢さや運用能力を養うのには必要不可欠なトップダウン方式の手法である。発表者は高校で9年間そして大学で5年間の多読指導を実践した。多読への動機づけ調査からは、多読を促進もしくは阻害する要因が特定され、それを基に、多読を阻む要因を取り除き、学習者の読書量を大幅に増加させた経緯が報告された。

【第4室】 司会/報告: 横川 博一 (神戸大) 日中韓における高等学校英語教科書の語彙とトピックの比較

仁科泰徳(LEC大学・非常勤講師)

TOEFLの国際比較データにおいて日本人の英語力がかなり劣っているといった問題意識を背景に、日中韓の教科書をデータベース化し、コーパス言語学の手法を用いて語彙およびトピックの分析を行ったものであった。こうした目に見える形での比較・分析は大変興味深く、語彙レベルや語彙の意味的特徴などの点で、具体的にどう日中韓で異なるのか、それが日本の英語教育のあり方にどのような示唆をもつのか、今後の研究に期待したい。

医療系ESPのための語彙リスト構築の試み: 語彙の特徴性(keyness)に母データのジャンルが及ぼす影響

坂本智香(神戸女学院大)

タイトルが示すとおり、医療系ESP教育に効果的な語彙リストの作成をめざした研究であったが、同じ医療系の分野でもジャンルの違いによって語彙の特徴に、どのような違いが見られるかという基礎研究を行った点で大変意義深い。氏は、3つの異なるジャンルの言語データ

をコーパス化し、参照コーパスとしてのFROWNコーパスとの比較を行った。ESP教育にコーパスによる語彙リストの作成がどう貢献するかという点で、期待は大きい。

英字新聞を用いた英語授業

加藤雅之(神戸大)

Daily Yomiuri を用いた大学での英語授業について、まさに今取り組んでいる最中の新鮮な実践報告であった。英字新聞を使う意義、クラスでの活動などが具体的に紹介されたが、あらかじめ配布された新聞から自分で選んだ記事を読み、英語でコメントをつけることが課題であるが、それにウェブが活用されていること、授業では記事のコメントをもとにグループでディカッションが行われる等、高校等でも活かせるアイデアが満載であった。

【第5室】 司会/報告:佐藤恭子(プール学院大) シャドーイングの中学英語教育への応用 シャドーイングはリピーティングより効果的かー

望月 肇(神戸国際中・高校)

本発表では、シャドーイングがリピーティングよりも効果的な学習方法であるかどうかの検証するための、研究計画が提示された。発表者は、シャドーイングの中学英語教育への効果をすでに検証している。それによると、中学2年生のリスニング力が、毎回の授業で20分間のシャドーイング練習を用いることにより伸びたとのことである。今回計画された実験は、この先行結果を受けた継続研究として位置づけられていた。

リーディングのためのシャドーイング指導:読解力伸長への効果検証(1)

氏木 道人(関西外国語大学短期大学部)

本発表では、シャドーイング練習により復唱力が向上すると、読解力全体の向上にも影響を与え、特に下位群の学生にその影響がみられるとの仮説のもとに、実験が行われた。その結果、仮説のとおり、習熟度の低い学習者のほうが復唱指導の利益を受けやすいという結果が示され、これは「限定的で部分的な効果」であり、読解中にL2の知識が効率よく利用できないというレベルに限定した効果であることを示唆していると結論付けられた。

CALL教室におけるシャドーイング実践

伊藤佳世子(関西学院大・非)

本発表は、アウトプット中心の授業におけるシャドーイングの練習が、リスニングやリーディング力に与える影響を考察したものである。実験対象者は、英語専攻で

ない大学1年生で、授業での20分間のシャドーイング練習の及ぼす効果が検証された。その結果、リーディング力においてのみ伸びがみられ、その要因として学生の出席率やリーダーシップなど学生の学習への関わり方の点から考察が加えられた。今後の検証を期待する。

WBTによるShadowing指導

倉本充子(広島国際大)

本発表では、4年間の時間を費やして共同研究者と共に構築された「学習者にやさしい」WEBを用いたシャドーイングの実践例が紹介された。シャドーイング素材としてVOAを中心としたニュース素材が配置されており、自主学習にふさわしい学習環境を提供された工夫が随所にみられた。具体的な使用法などの質問がなされ、今後の新しいシャドーイング指導のあり方に対する関心の高さがみられた。

【第6室】 司会/報告:有本 純(関西国際大)

Pronunciation Teaching: From Theory to Practice

吉田 弘子(大阪女学院大)

4つのリサーチクエスチョンを提示し、各々に対する考察を述べた。1)教室で発音を教えるべきか、2)日本人学習者にとってネイティブのような発音は目標となるのか、3)日本人教員は発音の指導・評価が可能か、4)発音指導は学習者に影響を与えられるか。さらに、発音の授業を通して得た2種類のデータを分析し、World Englishesの観点から、上記の疑問に対する解答を導き出した。即ち、1・3・4は肯定し、2を否定した。

日本人英語学習者による語頭子音「破裂音+流音」の算出に関する考察

里井 久輝(摂南大)

英語の破裂音と流音 /l, r/ の子音結合からなる文および語を用いて、日英各3名の被験者の録音を、スペクトログラムおよびVOT(voice onset time)に注目し、音響分析を通して比較検討した。結果として、日本人被験者は英国人被験者と比べて、語頭子音群のVOT値が極端に小さく、無声破裂音の適正な調音が実現しにくいこと、スペクトログラムでは、lで母音性が強く出ており、モーラリズムで発音していることなどが判明した。

Correctness Scales in Evaluating Learners' English: Why is an error an error?

中西 のりこ(関西国際大)

日本人英語学習者の書く英文の評価として、4つの尺度(文法性、容認性、明瞭性、理解度)を導入し、工

ラー(標準からの逸脱)を、各尺度の基準および相互関係を明らかにした。さらに、それらの尺度を用いて、実際に学生が書いた英文を分析した。特に、Understandabilityという尺度は、発表者独自の発想で作られており、これは語用論の観点から、書き手の意図を評価しようとするもので、新たな評価基準となり得る。

「しゃべる」から「しゃべらせる」学生主体のクラスを教師主体でつくる

鈴木 規巳洋(京都橘大)

「しゃべらない学生」の原因を分析し、教師主導から学生主体の授業へ転換するために発表者が実施した工夫や実践を報告した。教育環境の整備、学生との関わり方、比較文化の学習、クラス内指導などを例示し、最後に学生の参加度や理解度を記録させる「学生による学生評価」を紹介した。また、大学の教員がなすべき新たな役割(クラス運営、学生研究など)についても提案した。

第2日 研究発表・実践報告

【第1室】 司会/報告:今井 裕之(兵庫教育大) 語彙数の増加と読解力及び聴解力の伸びとの間の相関性に関する一考察

森永 弘司(立命館大・非)

大学生対象の授業(リスニング授業とリーディング授業)での語彙力の伸びを記述分析した。それぞれの授業でリスニング、リーディング力を測るテストも実施されたが、テストの方法や実施時期の問題もあり、それぞれの伸びと語彙力の伸びの関係が議論できないとの指摘がフロアからあり今後の課題が明らかになった。

学校だからこそできる小学校英語活動 - 公立小学校3年での取り組み - 伝える喜びを目指して

稲岡 ひとみ(神戸市外国語大・院)

ギリシャの小学校にポスターレターを送るまでの実践報告。活動のAuthenticityやホールランゲージアプローチを意図して行われた実践で、活動意図が明快だった。言語学習の観点からの質問や、学校外部から指導者が教室に関わることに示唆的な提案がフロアからなされた。

小学校英語活動サポート事業を通してのカリキュラム

開発

小川 一美(大阪教育大・院)

吉田 晴世(大阪教育大)

小学校英語活動サポート事業の取組みに参加した大学生へのアンケートから、大学における小学校英語教員養成のあり方を探った実践に基づく報告であり、

conventionalなピラミッド型カリキュラムの問題点が指摘された。ここでも小学校英語活動の運営指導に関わる方から、現在の体制の問題や現場が今必要としていることについて示唆に富む提案があった。

【第2室】 司会/報告:杉森 直樹(立命館大)

メディア教材の印刷化の可能性

石井敦子(大阪教育大・院)

VOAのTV番組を利用し、紙媒体でのリーディング教材を開発する試みについての報告が行われた。番組のトランスクリプトを文字化し、そこに写真やタイポグラフィといった視覚情報を追加したリーディング教材を作成することにより、読者の内容理解を助けたり作者の意図を示す機能を持たせることを目的としたとのことであった。カラー印刷された実物の教材が提示され、開発の目的等が説明された。

SMILによるReal Video・Real Text・Real Flash総合英語教材の効果

鍛冶大佑(大阪教育大・院)

PC上のデジタルビデオの一形式であるReal Videoに文字やアニメーション等の機能を追加したマルチメディア英語学習教材の開発についての発表が行われた。ニュース動画の画面下部にトランスクリプトをカラオケ的に表示させ、音声と文字をシンクロさせて表示させる教材のデモが行われた。3種類のスクリプト提示法を用意し、その見やすさを答えさせるアンケートの結果が報告され、どのような提示方法が最も見やすいかについては学習者によって異なるという見解が示された。

TTS合成音声の英語教育現場での活用研究

東 淳一(流通科学大)

パソコンに入力した文字を合成音で発声させるTTS(Text-to-Speech)技術の英語教育における活用に関する発表がなされた。最新のTTS技術は以前とは比較にならないくらいに発達してきており、ネイティブに英文を読んでもらうかわりに、TTSソフトウェアに発声させることが現実的になってきていることが報告された。発表では最新TTSソフトウェアの幾つかが紹介され、その利用方法や実際にどの程度の音質の音声が発声されるのかが示された。発声速度の調整は可能か? デモ使用はどの程度可能か? など多くの質問がなされた。

【第3室】 司会/報告:中井 英民(天理大)

日本人英語話者と英語母語話者の"schwa"の産出の比較

杉浦 香織(関西学院大・院)

3人のNS(native speaker・大学教員)と7人のNNS(日本人英語上級者・大学院生)を対象にした、英語弱母音「シュワー」の産出に関する調査結果と考察が述べられた。特に、語中のシュワーでは、NSとNNSに長さではなく質(舌の前後の位置)に差があること、ISI(Inter Stress Interval)では、NNSに長さのばらつきが見られることなどが報告された。シュワーの産出はプロソディーの点で英語らしさを決定すると考えられるので、これらの研究結果が今後の発音指導に応用されることが期待される。

Politeness strategies used in persuasive communication

范 然(神戸大・院)

中国の古典文学『紅樓夢』に現れた38の「説得の場面」をポライトネス・ストラテジーの観点から分析し、中国的なコミュニケーションについての考察が報告された。分析からは、ブラウンとレビンソンの理論に反し、どの場合も「そのままFTA(faceを脅かす行為)を行う」ことが少なく、またFTAを軽くするためポジティブ・ネガティブ両方のfaceを満足させる方略が多いことが分かった。フロアからは、この研究結果の普遍性と言語教育への示唆が課題として指摘された。

日本人大学生英語学習者のプレゼンテーションにおけるコミュニケーション方略

泉 恵美子(京都教育大)/沖原勝昭(神戸大)

英語でのプレゼンテーションの成否は、発表後の質疑応答に負うところが大きい。この研究では、日本人大学生の質疑応答の傾向を分析し、使われているコミュニケーション方略の種類と質が明らかにされた。そこから、質疑応答を成功させるためのリハーサルや方略を指導することの重要性、さらには日本人話者に多い「沈黙」を埋める表現やテクニックを指導することの有益性が論じられた。コミュニケーション能力の育成に関して極めて貴重な指摘がなされた。

講演 1

コーパスと「100語」が教えてくれたもの:基礎語彙の英語学習における重要性

講師: 投野 由紀夫先生(明海大)

講師紹介/報告: 石川 慎一郎(神戸大)

現在は「空前の語彙ブーム」の時代であるが、これは、コーパス言語学の発展に支えられたものである。コーパス言語学は、とくに基本的な語の姿に関して、知られていない新事実を次々に明らかにしている。たとえば、書

き言葉における最も頻度の高い語はtheであり、これは書き言葉が名詞を中心とする構造を持っていることを示す。一方、話し言葉の高頻度語には代名詞などが多く含まれ、発話が「私・あなた・それ・そこ」を中心に展開されることを示す。さらに高頻度語をより大きなスパンで眺めていくと、およそ上位2000語程度がとくに重要な語であることが分かるが、語の重要性を語る場合は、「認識語彙と活用語彙」の違いについて押さえておく必要がある。こうした語彙研究は、さまざまな教育的応用可能性を持つ。たとえば現在関心の高まっている小学校英語教育について言えば、従来は教育の中身を現場の自由裁量にゆだねていたため、一貫性のあるカリキュラム構築は困難であった。しかし、制度的な小学校英語教育を見据えて考えると、教育の「重点事項を明示する」ことは不可欠であり、その場合、たとば語彙を切り口にしたカリキュラム設計という視点も考えられる。こうすることで、語彙ベースで小学校から「中学への受け渡し」をスムーズに行うことも期待できよう。また、語彙の重要性を鑑みれば、指導要領などにおいても、より適切に語彙が位置づけられることが望まれる。

講演 2

日本の英語教育近未来～学校教育の場合～

講師: 金谷 憲 先生(東京学芸大)

講師紹介/報告: 瀬川 俊一(京都府立名誉教授)

学校教育を英語教育に限定して眺めて見ると、矢継ぎ早に改革のための施策が実行されているのが分かる。小学校英語教育、中学校に於ける週3時間制度、高校に於けるSELHiの実施、英語科担当教員に対する悉皆(しっかい)研修、大学入試センター試験へのリスニング・テスト導入、等々。日々の授業実践に加えて、これらの施策への対応に追われて、教育現場には疲弊感が漂っているように思える。

このような状況下で、英語教育現場の今後の状況を予測するのは困難ではある。ELEC(英語教育協議会)より共同提案した『英語教育政策提言』(<http://www.elec.or.jp/>)と現在の諸政策の発信源となっている文部科学省『英語の使える日本人育成のための行動計画』とを比較検討して、今後5～10年ほどの近未来を考えてみたい。

近未来に起こりそうなことは、1. 小学校英語教育の必修化、2. 学習指導要領の改訂、3. 本年度で4年目の英語教員対象悉皆研修制度の終焉、4. SELHiの終

了、5. センター試験へのリスニング・テスト導入の波及的な影響、6. 大学全入時代の到来、等々である。これらは当然、次のような課題をもたらす。1. については、5・6年生の授業で週1回の英語科授業を確保が可能か、中学校英語の前倒し現象の防止が可能か、小・中連携の動きに混乱をもたらさないか、等々、2. については、中学校週3時間体制の改善は可能か、小・中・高全体をつなぐシステムの構築が可能か、等々、4. については、現行の高校科目構造の改良が可能か、多様な高校での標準的な授業過程の確立が可能か、等々、6. については、大学全入では学生の学習意欲・動機付けの維持が困難ではないか、等々。

上記のように検討して、次のように英語教育の目標についての提言をしておきたい。高等学校卒業までには、国民一般の英語力の到達度は、現行の中学校3年間で学習する英語力を修得する。高度の英語力を必要とする国民には、必要度に応じて設定された英語力を修得する。戦略(strategy)の失敗は戦術(tactics)に拠っては修復不可能であるから、国家施策としての英語教育政策を立案する際に、上記のような課題解決が可能な方策・施策(戦略)の立案を強くよう要望しておきたい。(エピソードをも紹介しながらの内容豊富な講演から、特に取り上げたい項目に搾って紹介している事をご了承下さい。

シンポジウム

KELES 10年，回顧と展望

シンポジスト：金谷 憲 先生(東京学芸大)
齋藤 栄二 先生(関西大)
沖原 勝昭 先生(神戸大)

司会/報告：瀬川 俊一(京都府立大名誉教授)

『予稿集』184頁に記載の意図で、本シンポジウムを行った。

齋藤講師：学習者の英語学力低下や教師の質の低下が批判されている現状を打開する方法はあるのか。生徒に英語力をつけられる教師を目指しての研修をすることにより、打開可能である。教師の自己研修に加えて、大学等の教育機関が提供する研修に於ける研修で指導力向上は可能である。全ての教員が再研修する時代の幕開けと言える。具体例として、関西大学での3段階を経ての具体的な「英語指導力開発ワークショップ」の紹介があった。『予稿集』186頁参照。理想の授業を

展開することは不可能ではある。同好の士が集まって研修するのが学会だから、学会で不可能を可能にする方策を検討するのが今後の課題である。

沖原講師：「自立した学会から更なる飛躍を」(『予稿集』187頁)と題して、本学会設立の経緯、略歴を簡潔に回顧した後、本学会の特徴を(1)地区別活動の活発さ、(2)会員構成の包括性(inclusiveness)、換言すれば、共通項は「英語」のみという多様な会員の集合体、にあると説かれた。今後は、日本の教育行政に働きかえるために、学会として研究資料を蓄積し続けること、小学校から大学までの学校内教育と学校外教育との連携を強化して教育研究を推進してゆく姿勢の重要性、を力説された。神戸大学での文部科学省のGP(Good Practice)計画に基づく大学教育における実践活動例を、学生の映像ビデオを活用しながら紹介されたのが、印象的だった。

金谷講師：講演に引き続いての登壇であった。総論的に次のような指摘があった。英語教育学は臨床部門を持つ医学のように、研究と研修の両面を兼ね備えている。教科教育の本質から、英語教育学会としては、研究指向とともに、実践報告の大切さをも認識してはならない。技術訓練(skill training)の場・機会は他にもあるが、学会にも必要ではないか。「英語教育学」は未だ40年ほどの歴史しか無い。今後は学習者理解が中心的な課題となる研究も必要度が増すように思われる。

質疑応答：小学校英語教育に関して、母語修得への影響、等、学問的に未解決な課題を抱えて必修化する事の意義を執拗に問う大学院生の質問が、学会や世間一般での賛否両論を想起させて興味深く思われた。

懇親会

大会第1日目、投野由紀夫先生によるご講演後、当日の参加者の多くが先生を囲む懇親会に三々五々集まられました。クラシック BGM により素晴らしい懇親会場へ誘われ、山岡俊比古先生による乾杯のご発声から緊張の糸がほぐれ、親しく歓談が繰り広げられました。投野先生からはご講演とは趣の異なる当意即妙なお話を、また、齋藤栄二先生からも翌日の大会への活力となるお話を頂きました。(報告：倉本充子)

会計よりお知らせ

会費納入のお願い

年会費は以下の通りです。

1. 一般会員(関西のみ) 5000円
2. 一般会員(関西+全国) 7000円
3. 学生会員(関西のみ) 3000円

4. 学生会員(関西+全国) 5000円

郵便振込: 00910 - 7 - 39666

加入者名: 関西英語教育学会

年会費に関するお問い合わせは,
会計 岡 良和まで [oka@[u]uhe.ac.jp]

紀要DVD販売のお知らせ

待望の紀要DVDが刊行: 英語教育研究の全貌をPCデスクトップに!

『英語教育研究』過去28年分、『卒論・修論研究発表セミナー発表論文集』過去9年分をすべて電子化。鮮明な画像で論文を通読できるほか、OCRによるテキスト情報を埋め込みましたので、論文内

の単語などでの検索も可能になりました(ただしOCRの認識率は100%ではなく、完全な検索はできません)。

KELESの歩みの記録として、また、英語教育研究の必携情報レポジトリとして、ぜひお手元におそろえください。

会員価格 3,000円

第32回全国英語教育学会高知研究大会

- * 日時: 2006年8月5日(土)~6日(日)
- * 会場: 高知大学朝倉キャンパス
- * 参加申込締切: 7月14日(金)
- * 問題別討論会(KELES担当): 「語彙習得 - 新しい研究の視点 - 」
提案者: 倉本充子(広島国際大), 藪内 智(京都精華大), 石川慎一郎(神戸大)
石川保茂(京都外大), 杉森直樹(立命館大)
- * シンポジウム: 「日本の英語教育を考える - 小学校英語教育の課題と方向性 - 」
提案者: 萬谷隆一(北海道教育大), 内田伸子(お茶の水女子大),
堀江祐爾(兵庫教育大), 金谷 憲(東京学芸大)
- * 大会ホームページ: <http://www.el.kochi-wu.ac.jp/kochi2006/>
- * 問合せ先: [nasu@\[cc\]kochi-u.ac.jp](mailto:nasu@[cc]kochi-u.ac.jp)



学会創設10周年
記念ロゴマーク

関連学会情報

第46回外国語教育メディア学会全国研究大会

- * 日時: 2006年8月2日(木)~4日(土)
- * 会場: 京都産業大学
- * テーマ: 「学習者の自律に果たす教員とメディアの役割」
- * 基調講演者: Dr. Ken Beatty (前香港大学・フリー教材作成者), 岩崎克己先生(広島大学)
- * 全体シンポジウム: 「学習者の自律に果たす教員とメディアの役割」
- * 問合せ先: secretariat2006@let-kansai.org
- * 学会HP: <http://www.let-kansai.org/>

《 関西英語教育学会ニューズレター 》

編集発行: 関西英語教育学会(KELES)事務局

〒564-8680 関西大学外国語教育研究機構 吉田研究室内

TEL: 06-6368-0477 (直通)

E-mail: keles@infoseek.jp